
fate/zero justice to justice

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e / z e r o j u s t i c e t o j u s t i c e

【Zコード】

Z5616Z

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

魔術師同士が己の願いを叶えるために殺し合つ戦い・・・それが聖杯戦争。60年に一度のそんな『お祭り』前に殺人鬼に殺されそうになつた少女こと久城伽耶は死を覚悟した時、殺人鬼が作った魔法陣から赤毛の青年を呼び出す。その彼の名は『ネギ・スプリング・フィールド』・・・親子続いて英雄と呼ばれた人間であった。

act・0 一筋の希望（前書き）

fateキャラがネギま世界に来るのはよくあるけれど、ネギがfate世界に来るのは少ないと書いてみました。ただし、彼はマスターではなくサーヴァントです。触媒云々の設定に関しては一応考えています。とりあえず、今回は様子見です。

act・0 一筋の希望

> side・伽耶 <

ああ、私もうすぐ死ぬんだ。

腰を抜かしてただ怯えることしかできない、肩までかかる髪と平凡な四角いメガネが特徴的な少女・・・久城伽耶は目の前の光景を見つめ真っ先にそう思考した。

部屋中には夥しい量の紅い雫によつて発生している鉄の臭いが立ち籠めている。原因の大元を辿ればそれは彼女の最愛の家族であり唯一の肉親である母親に他ならない。

つまり、伽耶の母親はもうこの世にはおらずいすれ朽ち果てる予定の抜け殻が体内を循環する赤い液体 血液を暴力的に抉られた腹部から垂れ流している状態なのだ。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよーっ、繰り返すつどに四度 あれ、五度だっけ?えーっと、ただ満たされるトッキーをー、破壊する・・・・だよなあ? うん!」

また、ソレ(・・)を行なつたのは古本を片手に服が血で汚れても気にせず意味不明な呪文めいた言葉を奇声を上げながら呟いている青年であり、現在冬木市で発生している無差別連續殺人の犯人・・・雨生龍之介であつた。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよつと、は～い今度こそ五度ね。オーケイ？ イエスアイム、オーケイ！！」

龍之介は先程間違えた部分を再び読み直すと自問自答し興奮を露わにする。

伽耶はその姿を絶望を感じた虚ろな瞳で無言で見つめ、ただ刻一刻と迫る死を受け入れる準備を心の隅で考え始めた。

「ねーねーお嬢ちゃん、悪魔って本当にいると思うかい？」

現実に「悪魔」という存在は間違いないだろう。妖精とか天使とか神様だつてきつといないに違いない。
なぜならば、この男が今まで殺してきた罪のない人間が誰一人として助かつていないのである。

殉職したガタイの良い父親ならばこの程度のひょろつとした男などを業で倒して逮捕し、永遠に刑務所から出られないようにすることができるというのにとことん自分はついていない。
自分なりに母親を支えてきたつもりだったけれどこの状況ではもはや全てが台無しだ。このままでは身寄りのない自分は生きていても行く宛がない。死んでも死にきれない。

(・・・だけど、私の運を全て使ってでもいい。この世が理不尽だけの世界ではないことを証明して欲しい)

こんな時に都合のいいヒーロー・・・（この際、顔とかの贅沢は言わない）が突然現れて自分を救ってくれたら、と恐らく叶わないだろう願いを私は祈った。

すると突然、右手の甲にまるで切り傷に消毒液をふりかけた時のような激しい痛みが走った。それは一瞬にして収まりはしたが本当に突然過ぎたので私の心臓の鼓動を急速に早めた。

（・・・何、これ。薔薇と茨みたいな・・・刺青？）

試しに「ゴシゴシ」と擦つてみるも垢を落とすように消える様子はない。正直、こんな状況でこんな微妙で不思議な現象に遭つても困ると思つたのだが、ふと吸い込まれるように自然と体が動いて青年がさつきから何かと眩っていた血の魔法陣の中へ入り込んだ。

そしてその瞬間、屋内だというのに尋常ではないほどの大風が吹き抜け眩い光が私の視界を支配した。反射的に顔を覆い光から目を守る。

「スゲエ！－こ○○！だぜ！」いや・・・この本、マジパネエ！－

眩いでいた呪文が無意味でなかつたことに青年が興奮しているのが聞き取れるが、私が彼のその声を聞いたのはこれが最後であった。なぜならば

「・・・それは良かつたね。ついでこと言つてはなんだけれど

『「」褒美』だ』

「 ガハツ！――！」

聞き覚えのない第三者の声が聞こえると共に青年が殴られ壁へと叩きつけられ氣絶したからだ。

警戒しながら恐る恐る覆っていた腕を退かすと、ローブを着た身の丈もある杖を持っている若い青年が立っていた。

彼は部屋を見渡し、この部屋で起きていた出来事を把握しようとしているようだった。

「・・・やれやれ、殺人現場に召喚されるとは思いもしなかつたけどギリギリ間に合ったみたいだ」

偶然というか必然的に彼と田と田が合つ・・・かなりのイケメンだ。また、その表情は非常に安堵してまるで見ていのこちりさえ嬉しくなるように感じられた。

「立てるかい、君？」

「は、はい・・・」

紅くなってしまった顔でドキドキしながら差し伸べられた手を握り私は立ち上がる。

そして問うた、「貴方は何者ですか?」と
う答えた。

彼は問いにこ

「キャスターのサーヴァント、聖杯の寄る辺に従い参上しました。
問おう・・・あなたが僕のマスターですか?」

絶望したまま死ぬはずだった私にこの夜、一筋の『希望』と
いつの光が舞い込んだ。

act・0 一筋の希望（後書き）

無触媒召喚ではないのですから。オリ主の久城伽耶は一応、ステイナイトの初期原案の女主人公みたいな容姿です。ちなみに中学生です。

細かい設定とかはのちのち更新します。

感想よろしくお願ひいたします。

女オリ主&サーヴァントステータス紹介（前書き）

色々と設定の修正を行いましたが、これでもまだ削ったほうがいいところは一言お願いします。

32本から28本に回路を変更し、色々と描きされた点を修正しました。

女オリ主&サーヴァントステータス紹介

＜主人公＞

久城伽耶
くじょうがや

♪ 37379 — 3006 ♪

魔術回路：28本 魔力：並

属性：地・水 戰闘方法：植物の武器化（例：薔薇 鞭）

特殊能力：？？？

14歳の主人公。中学生でクラスでは委員長をやっているほど真面目な性格だが何処か弱々しい正確の持ち主。考え方をよくして時々自分の世界に入り込んでしまうこともある。

父は刑事であつたが中学に上がる前に事件で殉職してしまったため母親と二人暮らしであつた。また、彼女の祖父もほぼ同じ頃に病気で亡くなっているので身寄りはほほいなし等しかつた。なお、母親は魔術師ではないが存在は知っていた。

しかし、雨生龍之介によつて最愛の母が殺されてしまい生き残つても死んでも不幸であることには変わりない状況に追い込まれてしまう。死を覚悟しつつも救いを何処かに求めていた彼女は最後の奇跡を願つて祈ると、突如として令呪を発現させることとなつた。そして、何かに導かれるように母の血で描かれた魔法陣の中へ入るとキヤスターのサーヴァントこと・・・『ネギ・スプリングフィールド』

を召喚することになった。

元々、彼女の家は『九条』と呼ばれる魔術師の家系であり自然に存在するモノ・・・彼女の属性に現れている『地』と『水』などを扱う一族であった。稀に特殊な力を発言することもあるという。父親も一応は魔術師であったが才能が乏しかったためほとんど魔術を使したことにはなかったという。

また、彼女は祖父と父から秘密裏に魔術刻印の移植を受けていて、お守りと称して『壊れた懐中時計』のようなものを渡されている。

＜サーヴァント＞

クラス：キャスター
マスター：久城伽耶
真名：ネギ・スプリングフィールド

属性：混沌・善

筋力：B 耐久：B

敏捷：B 魔力：A++ A（マスターにより低下）
幸運：C 宝具：A++

スキル：

カリスマ：B

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。Bランクであれば国を率いるに十分な度量。元々、英雄の息子として注目されていたが魔法世界を救つたことによりさらにそのカリスマ性が上昇した。（実際、ウェスペルタティア王国の王として活動していたこともある）

心眼（真）：B

修練と鍛錬によって得た洞察力。危地にあって冷静に活路を見いだす戦闘論理。

幾度となく戦い続けたネギにの天才性が發揮される。

陣地作成：B

「魔術師」クラス特性。

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。

道具作成：C

「魔術師」クラス特性。

魔力を帯びた器具を作成可能。

対魔力：B

魔術詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術・儀礼呪法などを以つてしても、傷つけるのは難しい。

自己魔力生成：C

マスターに負担をかけることなく魔力を生成できる能力。単独行動に近い性能を持つ。

精霊魔法：A

精霊に働きかけて魔力を行使する技法。魔術とさほど変わりはない。

宝具

闇の魔法：マギア・エレベア A + + 対人・軍宝具 最大捕捉 1↙???

直前に唱えた呪文を手元に留め、肉体に取り込み自らの靈体と融合させる闇の魔法。

取り込む呪文によって様々な能力が肉体に付加される。治療から攻撃まで幅広い。

千の絆：ミッレ・ヴァインクリ E ↴ A + ??? 最大捕捉 1↙???

形状は小さな革のパスケース。差込口に自分の従者の契約カードを差し込んで呼び出すと、そのカードのアーティファクトを自分で使うことができる。契約相手のアーティファクトの特性も完全に再現

可能。他人に貸し与えることも可能。偵察から決戦兵器まで数多く揃えられているため、ほぼ全てのクラスの特性を持っていることになる。（I.F設定によりネギま2・8巻においてテオドラとの仮契約破棄は完全なる世界との戦いのことも考えてしなかつたことになつていて。ただし、その後の展開はほぼ同一である。）

太陰道たいいんどう：EX A++（低下） 対人宝具 最大捕捉 1～10人

気弾・呪文に拘らず敵の力を我が物とする闇の魔法の進化形究極闘法。展開には数十秒ほど必要だがその効果は絶大である。その気になればエクスカリバーさえ吸収可能。最大の切り札。

キャスターのサーヴァントとして召喚された英靈だが、実際は死んでいないため（ある年齢を境に不老になり、闇の魔法に完全覚醒した時に不死化した）、セイバーと似たような状況に置かれている。（つまり、靈体化ができないということ）

彼の正体は、ネギまの世界にて親子二代に続き英雄となつた青年（元・少年）である『ネギ・スプリングフィールド』。原作から數十年ほど経つており（容姿は大人ネギ）、魔法世界のための火星緑化プロジェクトがまだ進んでいる状況で明日菜は未だ隕として眠っている。教師としての修行が完了後にウェスペルタティア王国をMM元老院穩健派やアリアドネー、ヘラス帝国の協力の下で再建し、魔法世界救済計画を本格的に実行に移した。

fat e世界の魔術知識をとある事情で知つており、その際に巻き

込まれたトラブルが後に伽耶に召喚されるきっかけをつくりた。
杯には『　　の役目からの解放』の願いがある。（本人曰く、
だの我僕に過ぎない）といつ（詳しい経緯はのちのち解説予定。）
聖

女オリ主＆サーヴァントステータス紹介（後書き）

主人公の能力は幽遊白書の蔵馬のローズウイップみたいな奴を想像してください。

あくまで例ですので必ず登場するとは限りません。

次回も短いですがお付き合いよろしくお願いします。

act・1 指摘と書き（前書き）

一言の欄で意見を書いてくれている読者の方に感謝です。悪い点で色々言われるよりもモチベーションが上がりります。

細かい修正はのちのち行います。

〈Side・伽耶〉

「・・・キャスター・・・サーヴァント?」

助けてくれた赤毛の青年は私に怪我がないか確認するといきなり中
学では習わないであろう横文字を言った。

一応、大体の意味はわかるのだけれど・・・ええと『キャスター』
はニュースの・・・じゃなくて、サーヴァントは確か『奴隸』
だったつけ?

・・・んん?『奴隸』?

訳も分からず頭に『マークを幾つも浮かべることになった私は
こうしていても埒があかないと思い恐る恐る聞いてみた。

「あの・・・今のはどういう意味ですか?マスターとか奴隸の意味
の言葉を聞いたような気がするんですけど」

「え、ああ・・・」めん、今のは定型文みたいなものでね。普通な
ら「はい、そうです」みたいなこと召喚者の魔術師にすぐに受け答
えられるはずなんだけど・・・正規の召喚じやないみたいだから今
のは不味かったね」

「しょ、召喚！？それに魔術師！？」

今度はあからさまにオカルト的発言が彼の口から飛び出した。

心靈現象とかのホラー系や魔法・魔術といったオカルトファンタジー系をあまり信じていない私にとってそういう言葉は受け入れ難い抵抗感がある。

しかしながら、彼が現れて自分を救つた今までの経緯から認められずにはいられない状況にあった。

「まあ、とりあえず落ち着いて。詳しい話はちゃんとするし君の身の安全は僕がしっかり保証するから」

「は、はあ・・・」

確かに今強引に聞き出している暇などなかつた。現状把握は後でいくらでもできる。

一先ず私はこの殺人現場となつてしまつた家と母の死体と憎き殺人犯の青年をどうにかしなければならなかつた。・・・ああ、やるこどが多すぎて頭が混乱する。

額をおさえて冷静さを取り戻そと試みるも色々あり過ぎてなかなか思うように頭のオーバーヒートは止まらなかつた。

そんな状況を見かねてかキヤスターと名乗つた青年は私に血で汚れていないソフナーで休むように言い、電話の場所を聞いてきた。

「・・・何をするつもりなんですか？」

「なに、簡単なことや。」

警察を呼ぶ

ズコッ！…と思わずソファーから転げ落としそうになった。そりゃあ、妥当な行動ですけれども…！」

「その前にその格好をどうにかしませんか、怪しまれますよ・・・」

ロープのままでは不審者に見られる可能性がある。せめてまともな格好に着替えて欲しいものだ。

「大丈夫大丈夫、ロープを脱げば・・・ほらね」

「あ、スー・・・ツ？」

意外にも中の服装はまともだった。といつかまとも過ぎた。そもそも何でスーツの上にロープ？
全く訳が分からぬ。

「それも追々話すよ、だから安心して」

私の疑問が余計に増えてしまった中で彼は淡々と電話越しの警察に

事情を話し十数分後、警察をおさらばすることになる愛しの我が家に招き入れ冬木市連続殺人事件に呆氣なく終止符を打つた。

・・・しかしそれよりもキヤスター（そう呼んでくれと言われた）あなたは、内容に嘘を含んでいるのに（主に素性）どうしてそんなスラスラと説明できるんですか？作り話得意なの？

またしても疑問が増えてしまった。

それからの話をしよう。

警察に事情聴取を受けた二人は知らない間に懸かつっていた龍之介の懸賞金と被害者遺族からの謝礼金を手に入れ両親と祖父が残した遺産を整理すると、殺人現場になってしまった家から必要なものを持ち出した後、祖父が趣味のために建てたという円蔵山上のアトリエ

付きの別荘へと移り住んだ。

幸いにも学校からそう遠く離れていたため、伽耶の学校生活には何ら支障をきたす事は形だけはなかつたが、親を共々失い精神的にも辛いだろうということで長期期間の停学をさせることにした。どうせ義務教育なのだから受験対策さえ大丈夫ならば自宅学習でも大丈夫だろうというキャスターの見解も考慮した結果である。ツッコミたい所満載だがキャスターの生前（？）の職業上勉学には全く問題はなかつた。

また、移り住んで手始めにキャスターは待たせるに待たせてしまつた『説明』を行うための安全な場所を確保もとい構築するために、彼が知りうる限りで強力な『侵入者感知』『特定対象の強制的魔力抑制』などの機能が盛り込まれた結界を固有スキルの『陣地作成』を用いて辺り一帯に張り巡らせた。

この時点ではまだ聖杯戦争は始まりすら告げていながらキャスターという立場上、自らが優位に立てる拠点・陣地を開戦前に早急に作成しなければならない。もし出遅れでもして陣地作成前に瞬殺されるようなことがあれば魔術師として恥ずかしいものがある。だからこそ、気合を入れて自分達だけの『工房』作成に取り掛かった。

そして後日、やつとのことで完成した『工房』にてマスターの伽耶とキャスターの本格的に初めてとなる説明話がリビングの丸テーブルの上で繰り広げられることとなつた。

「 隨分と説明を待たせて付き合わせてしまつたね、マスター」

「いえ・・・こちらこそ葬儀から財産管理までわからないことだらけだったから本当に助かりました」

身寄りのない伽耶の保護者としての立場を構築するにも実は言ひと結構時間がかかった。

暗示で人は直接騙せても、書類などは上手く偽装しなければ確実に怪しまれる。故にそちらの書類作成が足を引っ張り工房作成が遅れてしまった。

「いいんだ、あの状況で優先すべきことはマスターの今後の生活を保証することだつたから

彼は自分で入れた紅茶の香りを楽しみながら笑顔で私にそう言った。本当に書類作成から紅茶のおいしい入れ方まで何でも出来る男なんだなと感心してしまつ。

ついつい自分も顔をほころばせ一杯紅茶を口に含んだ。

「・・・それはそうとマスター、あなたの安全を優先して話せなかつたあの時の質問の答えなんだけど」

いよいよ、溜まりに溜まつた疑問の答えが得られるのか。

殺されずに済んでも未だに消えぬ恐怖感、そして始まるうとしている何かに対する危機感が今もこうして心中で蠢いている。それを少しでも軽減したいといつ気持ちでもう一度あの時のように私は彼に聞いた。

「キャスター、それにサーヴァント……魔術師についてと、今私が置かれている状態について教えて下さい」

「わかりました、順を追つて説明していきましょう……まずはマスターの置かれている状態からです。はつきり言いますと僕達は今、『聖杯戦争』という魔術師同士の殺し合いに巻き込まれています」

真っ直ぐ私の瞳を見据えると彼は淡々と私の疑問を解きほぐす言葉を紡ぎ始めた。

聖杯戦争、それは七人の魔術師が万物の願いをかなえる願望器『聖杯』を奪い合う争いのことである。

ただ殺し合うのではなく、彼らはそれぞれ自分が使役するサーヴァント 魔術師の世界において最高級の使い魔 を召喚し霸権を競わせるのだ。

彼らは最後の一人になるまで戦い続け己の願望を叶えるべく策略をぶつけ合つ。そして最後に残つた者だけが聖杯を手にして願いを叶えるのだといつ。

また、サーヴァントは召喚される際に七つのクラスを与えられてこの世に現界する。その七つのクラスとは

セイバー・・・剣士の英靈であり「三騎士」の一角。バランスが取れた能力を持つてゐるため「最優のサーヴァント」と称される。

アーチャー・・・』「兵の英靈であり同じく『三騎士』の一角で、高い単独行動スキルと射撃能力を持つ。

ランサー・・・槍兵の英靈であり「三騎士」最後の一角。最高の敏捷性と高い白兵戦能力を持つ。

ライダー・・・騎乗兵の英靈であり騎乗スキルがA+以上である英靈が該当し、高い機動力と強力な宝具を数多く所有するという。キヤスター・・・魔術師の英靈であり魔力に特化しており、全サークル中最弱とされるも自身のフィールド下では他のサー・ヴァントと互角に戦うことができる。

バーサーカー・・・狂戦士の英靈であり「狂化」の付加要素が付くクラス。魔力消費量が高いがその分ステータスが強化される。

アサシン・・・暗殺者の英靈であり予め召喚される英靈が決まっており、マスター狙いが得意である。

の以上であり、彼らはマスターの令呪によって従わされることになる。当然、彼らにも聖杯に願う願いを持つていたりするがマスターなしでは叶えることも不可能である。

「英靈というのは過去・現在・未来の時間軸から切り離された存在なんだけど、聖杯戦争において召喚されるのは一般的に過去の英雄だけだ。何故だか分かるかな?」

「えっと、召喚の為の触媒がわかるからですか?」

「正解だ。未来にも英雄と呼ばれる存在はいるだろ?けれど、彼らを呼び出すための聖遺物がわからない以上召喚するのは無理だ。だから基本的に過去の英靈・・・例えば神話に書かれている存在を参

戦する魔術師は召喚する

「ところではキャスターも過去の英靈？」

予想が正しければそんなんだろ？けど、残念ながら彼は首を横に振つて過去の英靈であることを否定した。といつことは・・・？

「レバーリーとは珍しいとかありえないはずなんだけどね。

僕は過去の英靈じやない、未来の英靈なんだ」

「で、でも、触媒がわからないって・・・」

説明してくれたことと彼の今言つたことは矛盾している。

触媒がわからないというかそもそも触媒なんて用意した覚えはないのに、何でよりもよつて未来人が召喚されてしまったのだろう？何かしら原因があるはずだけど、全く心当たりが見つからない。

「いや、マスターはあの時僕を召喚することができる『触媒』を持っていたはずだ。それが何であるかも大体見当がついている」

「・・・持つていたもの、身に付けていたもの　　あつ！！」

一つだけあつた。

祖父が私がまだ幼かつた頃にくれたお守りがあつた。『壊れた懐中時計』みたいな物だつたけれど不思議とデザインは気に入つていた。

祖父が好きだつたから今まで肌身離さず身に付けてきたけれど、まさかこれが

内ポケットから手のひらサイズの懐中時計のようなものを取り出し
テーブルに置き、キヤスターに見せると彼は大きく額き口を開いて
言った。

「 やつぱり、カシオペアか」

「 カシ・・・オペア?」

それがこの懐中時計もどきの名前なのだろうか。

どうやらキヤスターはこれをよく知っているようだし、聖遺物（触
媒）と考えてよいのだろうけど「これが一体何なのかを詳しく聞かせ
てもらいたい。」

「 本来の機能はもはや失われてしまつているがそれは、実を言つと
こち『タイムマシン』に該当する」

「 タイムマシン! ? これがですか! ?」

想像していたタイムマシン像と全く違つた。

てつくり、机の引き出しに隠されているようなやつか木でできた箱
みたいのを想像していたけど・・・って、これはアニメの観過ぎか。
未来ではこんなコンパクトな存在になつてているんだと思わず驚いて
しまつた。

「未来ではこれが開発されているんですか？」

期待に胸を膨らませ近未来の世界のことを尋ねる。が、しかし彼はまたもや苦笑して補足説明をした。

「『僕がいた世界』ではね。残念ながら、この世界じゃ恐らく開発されることはないだろ？。100%といつことはないけどさ」

「ことは違う世界……SFでも有名な『平行世界』の英雄だというキャスター。」

彼は何故祖父がカシオペアという平行世界の物を持っていたのか緯を一から説明してくれた。

「あれはまだ僕が修行先で働いていた頃の話だった」

中学2年の終わり頃から受け持っていた彼の教え子達の卒業まで残り数ヶ月となっていた時……突然それは起こったという。

突如として飛来したらしい謎の物体、というより魔法少女モノのアニメに登場しそうな杖はキャスターが仕事に疲れて眠つていた間に生徒を洗脳し強制的に魔法少女の姿へと変身させていたのだ。

同僚にしてかつてのライバルだった少年に叩き起され対処を始めた

キヤスターは協力してくれるであろう彼の師匠に助けを求めたのだが時既に遅し・・・彼女もとつぐに魔法少女に変身させられていた。

性格もハイテンションなつていた。

しかも相手は数の暴力で攻めてきた。一般人に秘匿しつつ男性陣は本当に涙目状態で懸命に戦い続け一人また一人と倒れていった。流石は元々魔窟の学園だった。

教え子を傷つけたくない氣持ちゆえに戦うことにキヤスターは葛藤する。でも自分が何とかしなければ被害は拡大し続け修行先は魔法少女という巫山戯た魔窟と化してしまつと使命感に突き動かされるよう立ち上がり彼女たちに向き合つた。・・・本来彼女らと一緒に高校に居れたはずの人物との約束を思い出しながら。

「彼女を犠牲にしてまで手に入れた平和な世界 それをどうしても僕は守りたかった」

生徒を氣絶させては優しく横にならせ続けたキヤスターは激闘の末、満身創痍の状態でイ力れた杖を持つ師匠と相対する。

「よく粘りますね～。ルビーちゃん、粗う相手を間違えたかもしれません」

「・・・ふざけるな、女装は学園祭の仮装だけで十分だ。他をあたれ」

「でも、髪の伸びた貴方の姿は・・・じゅるり 立派な男の娘ですよ 傷だらけの男の娘・・・ハアハア」

何かそう仲間に指摘されたことがあるといつ彼は良からぬ気配を感じて体を震わせる。

実際、その年に行われた文化祭では何時の間にか演劇で女性役をやらされた覚えがあったのだ。それも相手を言葉責めするといつ役だつたりした（内容は吸血鬼モノ）。

正直、逆はやめてほしかった。

「…………」

師匠諸共攻撃して引き剥がし破壊するしか方法はない。

これは師匠の吸血鬼としての再生能力を利用した方法だが、やりすぎれば取り返しのつかないことになるだろう。

「それでもやるしかない……」

覚悟を決めて高速詠唱を展開し、田の前の騒ぎの元凶に操られた師匠を見据えると身の丈の何倍もの長さを持つ雷の槍を構え飛び上がる。

まとも喰らえば一溜りもない一撃が放たれよつとした時
彼らは現れた。

「後に下がれ、少年」

「 ッー？」

自分の背後にはいつの間にか赤い服を着た二人組の男女がいた。そして、男の方は黒塗りの弓を構え矢の代わりに幾重にも曲がった短剣を師匠に向けた。

その瞬間・・・光が視界を支配し、目を開けた時には既に師匠の洗脳が解けていたのだ。

「結局、事件は『この世界』の第一魔法・・・平行世界の運営の使い手にして杖の持ち主によって解決したんだ。 だけど、話はまだここで終わりじゃない」

ここからが本題だった。

かくして連続魔法少女文化事件は丸く治まつたものの、平行世界からやつて来た二人組がいざ帰ろうとした時に問題が発生した。

ちょうどその頃、生徒のマッドサイエンティストと共同研究・開発していた航時機^{カシオペア}の改良型のテスト機を持つていたキャスターは二人とその場にいた皆よりも近くで別れを告げていたのだ。

元々トラブル吸引体质だったキャスターとうつかり属性を抱えた赤い服の女性、加えて幸運がEランク並みの赤い外套の男性が揃つてこの状況で何かが起こらないはずがなかつた。

「・・・つまり何が言いたいかと言つとね」

「巻き込まれたんですか？」

「うん……」

それもカシオペアの誤作動もあって彼らが元々いた時間軸から30年近く離れた時代に飛ばされてしまったのだという。一人にとつては元の世界だというのに前途多難である。

あとついでに上空からの自由落下も三人でしかけたらしい。

「唯一、杖で空を飛べる僕がどうにかして一人を助けたんだけどさ・・・着地地点がね、この別荘の庭だったんだ」

当然何事だと家の人気が飛び出してくるわけで・・・・・・その飛び出してきた相手が伽耶の祖父にして、潜りの魔術師だった久城桐春くじょうとうきはるだったのだ。

「僕の世界の常識と違つてこの世界の魔術師は互いに研究成果を秘匿する存在だつたから一人はすぐに彼を警戒したんだ。けれど、彼は親切にもこちらの事情を受け入れてくれて泊まる場所まで用意してくれたんだよ」

わかる、祖父はそういう人だった。
ちゃんとしつかり話を最後まで聞き届け、考えて考えて最終的に相手の言葉を受け入れる。また、命の大切さを誰よりも理解していた

ので私は尊敬していた。

「時代は違つても靈脈の質は高かつたらしく、帰るために必要な魔力の確保もそんなに時間がからなかつた。巻き込まれたのは不幸とはいえ、辿り着いた場所の運が良くてなによりだつたよ」

助けてくれたお礼として（二人が言つには等価交換）、語作動を起こして使い物にならなくなつた改良型1号機は『持ち主に危害を加える相手の自由を奪つ』半ば呪いめいた内容の術を施し、二号機に關しては『10秒以内の時間跳躍が可能』という仕様だつたので魔術礼装代わりに使えると考えてプレゼントした。（ちなみに、勿論残りの三号機は帰還用の仕様である）

そしてめぐるめぐる時代は過ぎていき、彼の孫であつた伽耶へと1号機を用いたお守りは受け継がれた。

と、以上がキャスターが召喚される経緯となる。

「予想外の結果とはいえ、結果的にマスターの命を守れたから良かつた。桐春さんに感謝しないと・・・」

祖父が築いてくれた縁は世界も時も越えて私を守つてくれたのだ。聖杯戦争抜きにして非常にありがたかった為、思わず瞳から涙が溢

れた。

「 マスター、君をとんでもない事に巻き込んでしまってすま
ないと思つ。だが僕は彼が守りつとした君を責任持つて必ず守り抜
こつ」

「キャスター・・・」

彼は私の隣に立つと膝をついて手を握り言つ。その言葉と瞳に嘘偽
りは全くないよつに感じられた。

「キャスターのサーヴァント、ネギ・スプリングフィールドは全身
全靈をかけてマスターである久城伽耶をお守りすることを今ここに
誓います」

「 はいっ！…よろしくお願ひします！…」

涙ぐんだ声で私は彼の誓いの宣言に力強く答えた。

> side out <

> side . キャスター <

涙で赤く腫れたマスターは泣きつかれたのかソファーに横になるとすぐに眠ってしまった。この時期は特に寒いであろうから毛布をさりげなくかけてあげる。

「11の歳で色々なモノを背負つてマスターは辛いだろう・・・」

優しく髪を撫でてあげ彼はやるせない気持ちで言葉を口にする。また、彼は彼で疑問を感じていたことがあつたりした。

「（思い返してみると、何故あの時僕は無理矢理元の世界の戻されたのだろうか）」

赤い服の二人がいた時間軸に戻つてから元の世界へ帰るという予定であったのに、自分だけ途中で引っ張られるように引き剥がされて気がついたら帰還していた。

おそれらく一人は念入りに調節したおかげで無事に帰還できただろうが、どこか解せぬ点が自分の中に残つた。

「（まるで、世界に・・・いや、『時間』に拒絶されたような気分だ）」

この不思議な気分の意味を彼が真に理解するのはまだ先のことになる。

一先ず彼は、自分の陣営以外の情報収集の準備を伽耶が寝静まつている間に行うことにしてしまつた。

> side out <

act・1 把握と誓い（後書き）

さつ氣なくステイナイトフラグ？

それはともかく、キャスターは原作ネギが結局明日菜を礎にして計画を実行に移して後悔しつつ戦い続けたいたという設定です。他のシリーズとは繋がりはありませんのであしからず。

次回は麻婆とトッキー陣営とキャスターの陣営調査編です。

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5616z/>

fate/zero justice to justice

2011年12月20日22時18分発行